結合点における「言語能力」

――エミール・ブルンナーにおける「言葉」理解――

加　納　　和　寛

はじめに

エミール・ブルンナー（Emil Brunner, 1889-1966）はカール・バルトと並び、いわゆる弁証法神学の指導的存在と目される。その一方で、特に20世紀第4半期辺りにおいては、バルトと比較する時、その顧慮される機会は必ずしも充実していたとは言えなかった。他方で、21世紀に入って以降、F・イェーレによる充実した新たなブルンナーの伝記が著されたほか[1]、A・マクグラスによる再評価がなされるなど[2]、ブルンナー研究には復調の兆しも見られる。従来、バルトのプリズムを通して語られることの多かったブルンナーの思想を改めて問い直すことは、こうした流れを踏まえて時宜を得たものであると考える。また、バルト研究の観点においては、ブルンナーとの論争が最も熱していた1934-1935年のバルトの小論集がバルト全集の一冊として2017年に公刊されたことは、ブルンナー研究においても新たな展開に貢献するものといえる[3]。本論文では特にブルンナーがバルトとのいわゆる結合点論争において主張した言語能力の問題に再注目する。

1.「結合点」とは何か――ブルンナー・バルト結合点論争の前史

いわゆる「結合点（Anknüpfungspunkt）」とは、神との関係を可能にする人

1　Frank Jehle, *Emil Brunner, Theologie im 20. Jahrhundert,* Zürich 2006.
2　Alister E. McGrath, *Emil Brunner: a reappraisal,* Chichester, Wiley Blackwell, 2014.
3　Karl Barth, *Karl Barth Gesamtausgabe, Vorträge und kleine Arbeiten 1934-1935,* (=KBG III 52), Zürich 2017.

間側の前提のことである[4]。結合点はブルンナーが創唱したものではなく、プロテスタント神学では少なくともシュライアマハーにまで遡ることができるとされる[5]。ここではシュライアマハーの意見を踏まえて19世紀後半期にそれを展開させたM・ケーラーの結合点理解に聴き、ブルンナーとバルトの結合点論争の前史における結合点理解の一つと捉えたい。

ケーラーは結合点の一つを道徳的な自己意識に見出す[6]。それは道徳を要請する啓示と呼応する。信仰以前の状態にあったパウロにおいて回心が「神の言葉(das göttliche Wort)」によって生じるのは、まさにこのためであるという[7]。意識において認識する限り、その声も内容も明晰に理解されることはないが、むしろそれにより内面を揺さぶり、関与する力は増すという[8]。この場合の道徳的な自己意識とはすなわち良心とみてよい[9]。ただし、結合点を結合点たらしめるのは、ケーラーにおいては義認の教理にほかならない。ケーラーによれば、義認の信仰こそがある完結した行動における回心の側面を表すことがあるゆえに、義認の信仰を認めなければ、自然人の人格性に結合点を見出すことはできないし、そもそもそうした人格性を保持できることも、あらかじめ与えられた恩寵だからである[10]。すなわち、神からの一方的な義認なしには、結合点も存在し得ない

4 Vgl. Heinrich Leipold, Art. «Anknüpfung I», in: TRE 5, 743.

5 H・ライポルトは「結合(Anknüpfung)」の神学的概念史を、シュライアマハーをもって嚆矢としている。他方でライポルトは結合の用語そのものの多義性や含意の変遷に触れつつ、カトリック神学における「適応(Akkomodation)」に結合の概念が内包されていることを示唆しているため、結合概念そのものをシュライアマハーが最初に提示したと即断することはできない(vgl. ebd)。

6 Vgl. Martin Kähler, *Die Wissenschaft der christlichen Lehre: von dem evangelischen Grundartikel aus im Abrisse dargestellt: mit einer Einführung von Martin Fischer,* Leipzig [3]1905 (Nachdrück Neukirchen-Vluyn 1966), 491,

7 Ebd.

8 Ebd.

9 Vgl. Leipold, aaO, 744. 19世紀のプロテスタント神学においては、恵みとしての信仰に呼応する人間側の自然的側面は良心であるというのが一般的な共通理解であり、特に当時のルター理解においてそれは顕著である(拙著「ハルナックのルター理解」『アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」—近代ドイツ・プロテスタンティズムの一断面』教文館、2019年、247-249参照)。

10 Kähler, aaO, 541.

ということになる。

他方で、ケーラーは義認の概念なしに道徳的な自己意識が結合点として作動し得ることを示唆する。すなわち、道徳的な自己意識とは、普遍的な人間の装置（allgemeine menschliche Anlage）であるので、これにより人間はいずれの宗教が本質的に確かであるかを識別できるとし、そこから神の観念の根拠や内実への問いが出され、それが神学を要請し、優れて特定の形式による神観念の啓示が求められる[11]。この点に関してキリスト教は結果的に唯一のものとして求められるとケーラーは言う[12]。従って、宗教的生の歴史的多様性は、普遍的な人間の装置としての道徳的な自己意識の表れに過ぎず、啓示そのものではないということになる。この観点についてケーラーは「結合点」の語を用いていないが、普遍的な人間の装置としての道徳的な自己意識が、啓示との結合点であると推察してよいであろう。

2.「論争」以前――初期ブルンナーにおける「言葉」理解

「結合点」という単語こそ使用されないものの、後の結合点問題に繋がる問題意識はブルンナーにおいて比較的早期にその萌芽がみられる。「神学の根拠と対象としての啓示（Die Offenbarung als Grund und Gegenstand der Theologie）」（1925）においてブルンナーは、ドイツ観念論およびゲーテ、ヘルダー、シュライアマハーらのロマン主義的傾向における啓示概念を「人間主義的啓示概念（humanistischer Offenbarungsbegriff）」と呼び、ブルンナーが言うところのキリスト教的啓示概念に対置する[13]。人間主義的啓示概念における啓示とは「現象における、あらゆる現象の神的な根源の微かな瞬き」である[14]。それは自然世界

11　Ebd.
12　Ebd.
13　Emil Brunner, „Die Offenbarung als Grund und Gegenstand der Theologie“ in: *Ein offenes Wort, Bd. 1,* Zürich 1981, 110. このブルンナーの論文および後述する他のものの邦訳には、『ブルンナー著作集　第一巻　神学論集』清水正訳、教文館、1997年があるが、本論文では引用に際して、清水訳を参照しつつも、基本的に原著から私訳した。なお、清水訳からは多くを学ばせていただいたことを記して謝意を表したい。
14　Ebd.

において普遍的に感知され得るものであり、人間においては内在的なものとして認識される。ブルンナーはこの啓示をあらゆるところで見ることができるとしているが、たとえばこの啓示とは「直観される神的なものと、直観する人間の霊との、あの神秘的な一致性（Idendität）」や、「宗教的な体験と啓示とが、また、人間の意識と神的な意識とが、直接的に一つになる」ところでも見られるという[15]。

ともすれば、これら神的なものと人間的なものとの一致に「結合点」が見出されるようにも思われるが、これらは後のブルンナーが説く「結合点」には重ならない。ブルンナーによれば、これら人間主義的啓示概念における啓示とは「啓示と非啓示との相違が流動的かつ相対的であって、それゆえ客観的な意味で、全世界が、あるいは全霊的宇宙が、その歴史的経験において、啓示として解釈され得る」からである[16]。対してキリスト教的啓示概念では、啓示者と被啓示者、すなわち神と人との関係は明瞭に弁別される。「両者の間には連続的推移はない。その境界は流動的なものではなく、絶対的で、堅く遮断されている[17]」。この両者の位相を前提とした上で、キリスト教的啓示とは、神による「自分自身を認識することを与えること（Sich-zu-erkennen-*Geben*）[18]」、「隠された神の自分自身の表明（Sich-kundtun）[19]」にほかならないとする。従って啓示は自然的なものではなく、人間的なものでもなく、「自然や理性が反抗するような奇跡かつ逆説」であるという[20]。しかもそれは非合理的なものではなく「ロゴスであり、言葉であり、ロゴスの形式によって、非合理なものよりもはるかに合理的なものに限りなく近い」ものであるとする[21]。ブルンナーはこのことを「理性（Ratio）、根源それ自体の根拠が現れる」「逆説であり奇跡」、また「キリスト教信仰の理性

15　Ebd, 111.
16　Ebd.
17　Ebd, 113.
18　Ebd, 114.
19　Ebd, 115.
20　Ebd.
21　Ebd.

に対する弁証法的二重性」にして「すべての合理性の実現」と別言する[22]。この言葉は、「我々が信じているものの言葉」であり、「我々が見ているものの言葉ではない」という[23]。

この主張には、一見すると結合点の要請など不必要に思える。ここで前提とされているのは自然と啓示の間の断絶性である。事実、ブルンナーはルターのそれを思わせるような、罪による断絶性を強調する[24]。断絶を超えるのは飛躍しかあり得ない。言うまでもなく人間から飛躍することはできない。それを実現するのは神からの「赦し」と「仲保者」にほかならない[25]。このことは啓示の言葉と人間の認識する言葉の次元にも適用される。ブルンナーは両者は同一のものではないという[26]。では神学者はどのようにして神の言葉を批判対象にすることができるのであろうか。

> 神学者がその名に値するのは次の場合のみである。すなわち、人間である神学者は、すべての人々が抱くあらゆる問い、それによって人間的探究と創造とを突き動かす、多かれ少なかれはっきりと意識される必要性を解決するのは自分ではないとする時、そしてそうした問いと必要性それ自体が認識されるところで、答えは与えられるという洞察から、すべての作業に取り組む場合である。というのは、この答えの内容は、我々が見るものの言葉ではなく、信じるものの言葉であり、我々の経験世界の向こうにある事実の真理だからである[27]。

ここにブルンナーの混乱を看取できる。彼は認識手段と認識対象とを混同している。「問い」「必要性」「真理」の内容はもっぱら認識対象である。「言葉」は認識対象であると同時に認識手段でもある。両者を交換可能な同一次元の概

22 Ebd, 118.
23 Ebd, 122.
24 「これ（キリスト教信仰）が前提としているのは、裂け目が見られるということ……恐るべき分裂、パスカルが怪物的なものと見たような分裂である。……つまり罪責（Sündenschuld）である」（Ebd, 116）。
25 Ebd, 117.
26 Ebd. 122.
27 Ebd.

念として扱うならば混乱が生じるのは当然である。認識手段としての言葉は関係性においてのみ成立する。語られる真理は彼岸からのみ発せられ、此岸にあってはその内容が「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったこと[28]」であってよい。この点においてブルンナーの主張はまったくもって至当である。しかし聞く者が理解可能な言葉でなければ、語りかけは成立しない。言葉として理解不能であるに拘わらず、聞く者に真理として感知され得る言葉があるとすれば、それはまさにブルンナーが峻拒しようとした「非合理的な、霧に包まれた宗教において生じる何か[29]」にほかならない。ブルンナーは此岸で生じるそれに対して徹底的に批判を加えたが、それの彼岸から来る可能性については並行して言及することをしなかった。管見であるが、ブルンナーが上記で引用した一節をもって同論文を擱筆しているのは、この論考が着地点を得たからではない。むしろ排除を目指したはずの自然主義的啓示概念に回帰しかねない端緒がこの時点で垣間見えてしまったからである。こうして、言葉における「結合点」が必然的に要請されるのである。

3. 神の言葉の受容体――「神のかたち」と「言語能力」への指向

この感知が「結合点」として初めて明示されたのが「神学のもう一つの課題（Die andere Aufgabe der Theologie）」（1929）である。ブルンナーは神学が課題とすることを二つに区別する。第一の課題とは、要するにキリスト教の使信、信仰の諸命題の自己省察であり、これについての説明は不要であろう。ブルンナーはこれを第二の課題に対置させるべく教義学的課題と名づけている[30]。第二の課題をブルンナーは「論争術的（eristisch）」神学と銘打つ。それは、人間に実存的問いを喚起し、その解決が人間理性のみでは不可能なことを示すものだからであるとする[31]。この実存的問い、あるいは神についての、神への問い（Frage

28 一コリント2:9（訳文は『聖書　新共同訳』日本聖書協会、1987/1988年による）.
29 Ebd.
30 Emil Brunner, „Die andere Aufgabe der Theologie“, in: *Ein offenes Wort, Bd. 1,* aaO, 176.
31 Ebd.

nach Gott）こそが結合点であるとブルンナーは言う[32]。ただしこの問いとは、自然的知識から展開して神的存在を問うような、一般的な意味での神探求のことではない。ブルンナーによれば、「福音によって、人間のすべての生、思惟、自己理解は、こうした疑わしい神理解にどっぷりと沈められていることが示される」ゆえに「すべての現象における生は、本質的に神を問うもの」だという[33]。換言すれば、いわゆる堕罪後の歪められた神のかたち（imago dei）こそが結合点であるということになる[34]。当然であるが、これは全人類のことである。たとえその者が観念論者であろうと、自然主義者であろうと「すべての者に語りかけることができる、というのは、彼らは人間だからである」とブルンナーは断言する[35]。「ここに結合（Anknüpfung）がある[36]」。もちろんこれは信仰の有無を問わず神の言葉を正当に理解できるという意味ではなく、「み言葉（das Wort）が彼らにおいて聴くことを得させる」ことであるとする[37]。つまり神の言葉を理解できる能力が先在しているというわけではない。

ここでブルンナーが「聴くこと（das Hören）」と表現している事柄は、「信仰」「肯定発言（das Ja-Sagen）」と換言される[38]。関連してブルンナーは、神学は「神の言葉について語る」と言う[39]。つまり、ここでブルンナーが示唆しているのは双方向的な言語能力のことではない。人間が神について語ることを可能ならしめる動因とシステムについてである。ここでは結合点とは、動的な能力ではなく、人間の本性的な状態を指している。ブルンナーは依然として人間本性の存

32　Ebd, 178.
33　Ebd.
34　Ebd, 180. ただし、ブルンナーはここでimago deiを「罪によっても単純に消し去られない」ものであるとしている。現在、オリゲネス等の主張に従ってimago deiを、人間のあるべき原初形態（神の似姿、εἰκών, image）と、堕罪後に残存している人間の特質（神のかたち、ὁμοίωσις, likeness）に区別する意見に従うならば、ブルンナーのimago deiは「神のかたち」に相当する。
35　Ebd, 185.
36　Ebd.
37　Ebd.
38　Ebd. ブルンナーは肯定発言の対義語として「否定発言（das Nein-Sagen）」を措定し、これを全く人間の行為であるとする。
39　Ebd, 186.

在論的議論に留まっているが、一方で自身の議論がバルトの枠組みを超え出ようとしていることを自覚する。「説教とは、それ自体のうちに、教義学的要素と論争術的要素の両方を含む。それはバルトが明らかに、あるいは明確には認識していないことであった。説教はみ言葉を宣教する――然り。だが説教はみ言葉を人間に話す[40]」。いわゆる両者のイマゴ・デイ論争に踏み込むのは本論文の主旨から外れるので、ここでは行わない。むしろ注視すべきは“み言葉を話される人間”にブルンナーが軸足を置いたことで、両者の方向性に差異が生じた現実である。バルトは『教会教義学』において、人間的な「神についての語り（Rede von Gott）」こそが、神自身が語ることであるとする[41]。説教といえども、神について（von）、神に関して（über）語ることしかできないが、それにも拘わらず、そこには神の言葉自体を語る意志（der Wille, das Wort Gottes selber zu reden）があるという[42]。言い換えるならば、人間は神自身が語る言葉に奉仕することしかできないが、神が人をして神自身の言葉に奉仕させる時、神が語る言葉自体が人間的な語りであるとする[43]。バルトのこの考えから結合概念を見出すことは難しい。バルトの考察はみ言葉に奉仕する人間、み言葉を語らせられる人間、そしてみ言葉そのものについてに留まる。これらはすべて神の側の作動体およびその周辺の事物である。“み言葉を話される人間”すなわち受容体についての考察はほとんど見られない。バルトの神の言葉の神学において説かれるのは、なぜ人間が神の言葉を宣教できるかの理論であって、なぜ人間が神の言葉を聞くことができるかは依然として不明のままである。この不均衡にブルンナーは気づいたと言えるであろう。こうして言語能力に関する考察を伴う「結合点」問題へとブルンナーは歩を進めることになる。

4. 結合点概念の結実――「前理解」の提示

ブルンナーは、結合点問題は「信仰によって受容された啓示の言葉によって

40 Ebd, 192.
41 Vgl. KD I/1, 52.
42 Ebd.
43 Ebd.

規定され、それのみによって理解される[44]」とする。この啓示理解はきわめて一般的なものであり、従ってブルンナーにおける結合点問題の出発点は必ずしも特徴的なものであるとは言えない[45]。ブルンナーは、新約聖書がコイネー・ギリシャ語で書かれているという人間的事実、すなわち、あらかじめ一般社会で構築された言語理解――ブルンナーによれば「前理解（Vorverständnis）」――を指摘し、これこそが結合点の一つであるとする[46]。そこには結果的に言語能力と理解能力一般が含まれる。ブルンナーは続く結合点問題として「教会が聖書翻訳をすることの意味[47]」と「教理問答[48]」とを挙げるが、これらは結局のところ「前理解」の結合点と内実は同一である。コイネー・ギリシャ語という前理解が、翻訳によって他の言語理解に置き換えられることで、その翻訳言語が前理解となる。教理問答（カテキズム）とは、聖書の使信が同一言語の枠内で若年者に理解可能な言語形式に置き換えられることを意味する。それは狭義には翻訳とは異なるが、ブルンナーによれば宣教が「何」を「誰に」向けられているかという方向性が「どのように」を規定し、その宣教を成立させる前理解としての言語理解という定式においては[49]、三者は同一と言えるであろう[50]。

これらの多面的な前理解の焦点は詰まるところ「そもそも言葉ができる者」に神の言葉は語られるということである[51]。「そもそも聞き分ける（Vernehmen）

44 Emil Brunner, „Die Frage nach dem «Anknüpfungspunkt» als Problem der Theologie “, in: *Ein offenes Wort, Bd. 1,* aaO, 241.
45 たとえば、名誉教皇ベネディクト16世ヨゼフ・ラツィンガーは「神学は、信仰に基づいて信じるキリスト教の啓示の神秘を、可能な限り理性によって理解しようとする探求」であるとする(ベネディクト16世『中世の神学者』カトリック中央協議会編訳、カトリック中央協議会、2011年、161頁)。
46 Ebd, 242.
47 Ebd. 242.
48 Ebd. 243.
49 Ebd.
50 1997年にラテン語規範版が発行された『カトリック教会のカテキズム（Cathechismus Chatholicae Ecclesiae)』は、速やかに各国語に翻訳されたほか、2011年に『カトリック教会の青年向けカテキズム（Youth Catechism of the Catholic Church)』が公開された。管見であるが、ブルンナーのこの結合点理解が（ローマ・カトリック教会はまったく意識していないと思われるが）カテキズムという次元の中において展開されたと看ることができよう。
51 Ebd, 249.

ことができるのが、キリストの使信を聞き分けるための結合点である[52]」。留意すべきは言語能力こそが結合点のすべてであるとブルンナーが理解しているわけではないことである。古典的な結合点としての良心理解をブルンナーは引き継ぐ。「良心における制約が、一方では決定的な結合であり、他方では決定的な対立を引き起こす場となる[53]」。加えて、自然的な神意識が挙げられる。「神意識がなければ偶像崇拝もない[54]」からである。

ブルンナーは自身の見解を比較的穏当なものと位置づける。というのは、ブルトマンの以下の意見表明を「大幅な推論」と看做しているからである[55]。

> さて、新約聖書においては、神の言葉の概念などというものは、その様式においてはさしあたり存在しない。……神の言葉の概念は、人間的な語りにおいて人間に対して行われることとほぼ同じであるといえる[56]。

ブルトマンは言語理解を単一的に捉えている。言語理解が同一であるならば、概念も同一であると考えている。しかしブルンナーは同一の言語理解において、神の言葉はその特有の概念を伝達するがゆえに神の言葉であるとする。その意味では、ブルンナーの見解は古典的な結合理解、いわゆる「神の言葉の神学」における神の言葉の断絶性、ブルトマンの単一的な言語理解らの総合的な弁証であるといえよう。しかしこれがバルトとの間に論争を惹起することとなったのである[57]。

---

52 Ebd.
53 Ebd, 251.
54 Ebd, 257.
55 Ebd, 242.
56 Rudolf Bultmann, *Glauben und Verstehen: gesammelte Aufsätze,* Tübingen 1954, 280.
57 1930年にブルンナーはイマゴ・デイ論争の実質的な嚆矢となる『神と人間（Gott und Mensch)』を上梓し、バルトに送付した。これに対しバルトは1930年6月2日付の返信において、神の言葉を「聞く」ことと、罪人にしてイマゴ・デイである人間の持つ「神のかたち」とを緊密に結びつけるブルンナーの見解をほぼ斥け、自分は両者をまったく別の問題と考えていることを提示している。同書簡ではバルトとブルンナーの溝が明確に示されるものの、言語能力および結合点への言及はほとんど見当たらないため、本論文では取り扱わない（Karl Barth, *Gesamtausgabe, 5. Briefe, Karl Barth, Emil Brunner: Briefwechsel; 1916-1966,* Zürich 2000, 192-196)。

5. 自然と恩恵――「言語能力」をめぐるバルトとの齟齬

既述のとおり、ブルンナーとバルトの見解の相違は以前より存在していたが[58]、一般的にブルンナーによるバルトへの最初の反論と目される「自然と恩恵（Natur und Gnade）」（1934年）において、ブルンナーはバルトの主張における「誤り」を明言する[59]。すなわち、「人間は罪人であり、ただ恵みによってのみ救われるのであるから、神によって人間に創造された神と同等のかたちの性質（Gottesebenbildlichkeit）は、完全に、つまり何の残存もなく消し去られている。とりわけ、人間の理性的本性、文化的能力、人間性は、もちろん否定されるべきものではないとはいえ、神と同等のかたちの性質の痕跡でも残りでもない」とブルンナーが理解するバルトのイマゴ・デイ理解はまずもって「誤り」であるとされる[60]。ブルンナーによれば、人間は神のかたちの担い手（Bildträger）として創造されたのであり、そのことの機能と規定は堕罪によっても廃棄されていないとする[61]。人間は「罪人としてもなお、語られる相手であること、神が語られる相手であることが中断されるわけではない[62]」。これによりブルンナーは、依然として罪人である人間にはなお応答責任性（Verantwortlichkeit）と言語能力という二つの結合点があると規定する[63]。人間が言語能力を持つということを、ブルンナーは「言葉を受ける存在（wortempfängliches Wesen）」と別言する[64]。ただし、この言葉を「受ける」というのは「質料的（material）」、つまり神の言葉に対して肯定や否定をいうことができるという意味ではなく、「純粋に形式的な語りかけの可能性（die rein formale Ansprechbarkeit）」であるとする[65]。ここに至ってブルンナーは神の言葉と言語能力の関係性を以下のように規定する。

58 イェーレは両者の往復書簡などから、1932年頃から方向性の相違は既に顕在化しており、1933年には対立は決定的であったと分析している（Jehle, aaO, 299-310）。
59 Emil Brunner, „Natur und Gnade – Zum Gespräch mit Karl Barth“, in: *Ein offenes Wort*, Bd. 1, aaO, 337.
60 Ebd, 337-338.
61 Ebd, 340.
62 Ebd.
63 Ebd, auch 189.
64 Ebd. 348.
65 Ebd.

神の言葉がまず人間の言語能力を創るのではない。人間は言語能力を失ってしまったのではない。言語能力は神の言葉を聞くことのできる前提である。しかし神の言葉は、神の言葉を信じる人間の能力を創る。この能力は、神の言葉を信じるべく聞くことができるように、聞くことを可能にするのである。結合点についてのこのような教説によって、「恵みのみ(sola gratia)」の教説が少しも損なわれないのは明らかである[66]。

ブルンナーはこの言語能力という神のかたちの「残り(Rest)」こそ教会的宣教の柱の一つであると強調する[67]。それは見方によっては必ずしもバルトの唱える、神の言葉の宣教と排他的に対立するものではない。バルトは宣教の作動体に力点を置く。対してブルンナーは受容体を強調していると看ることもできよう。ただしブルンナーはこのことをバルトに対して当に論争的に投げかけた。

(バルトは)行為のみ、啓示の出来事のみを認めようとする。しかし、彼がいうところの、啓示されたもの、啓示性は決して認めようとしない。……しかしそれは聖書的啓示概念のある一面にすぎない。別の面は正反対のものである。すなわち、神はいまここで私と語る。それは、神が語ったことに基づく[68]。

神がすでに語ったこと、すなわち聖書を理解できるからこそ、人間は神のいまここの語りかけを受けることができる。その前提をブルンナーは言語能力であるとするのである。

「自然と恩恵」に対し、バルトが全面的な異議を唱えたことは周知のとおりである[69]。J・ハートによれば、バルトが基本的にブルンナーの意見表明を

66 Ebd, 349.
67 Ebd, 372.
68 Ebd, 365-366.
69 この論争が単純に公刊物上の神学論争に過ぎないものではなかったことは、現在イェーレによって指摘されているところである。「自然と恩恵」は1934年5月に著され、直ちにブルンナーからバルトに送付された。一方でバルトは同時期にナチス・ドイツからの圧力に対する抵抗活動に忙殺されており、同年5月29-31日に開催された第一回告白教会会議に参加、いわゆるバルメン神学宣言の起草に挺身していた。結果的にブルンナーへの返答は夏休み後の10月まで

拒絶した理由の一つは、ブルンナーが人間学的な神学に依拠するあまり、常に聖書に立ち返りつつ再考するという、バルトが目するところの宗教改革的伝統を疎かにしていると看たことにあるという[70]。他方で、A・マクグラスは、バルトは、ブルンナーが人間学的な意味で提示したところの啓示理解能力（Offenbarungsmächtigkeit）を、啓示を受け取る可能性（die Möglichkeit, Gottes Offenbarung zu empfangen[71]）と明らかに誤認しているという[72]。確かに、バルトは「言語能力」、「言語受容性（Wortempfänglichkeit）」、「呼びかけられる可能性（Ansprechbarkeit）」をすべて「啓示理解能力」の言い換えにすぎないと理解している[73]。このためバルトは「言語受容性」を「啓示理解能力」と完全に同義語であると見做して自身の啓示論に沿って推論を展開してしまう[74]。このため、啓示以前から人間が保持する言語能力、すなわち明らかに聖書がそれによって書かれたところの言語理解にまで考察が至らない。付言するならば、バルトはブルンナーの主張の場を「神学と教会」と捉え、ブルンナーが自然神学に拘泥するのはこの「基本的な抽象概念の自然な成り行きに過ぎない」と断じる[75]。既述のように、ブルンナーが設定したのは明らかに実践的な意味での教会的宣教における説教であって、これを単なる「抽象概念」とするのは明白に誤認である。この意見の不一致というよりは論点の不正咬合と言わざるを得ないバルトの反論には、ブルンナーの主張の柱の一つが明らかに「言語能力」であるという観点からすると、奇異の念を禁じ得ない。従ってマクグラスの指摘は至当であり、ブルンナーの「言語能力」に関する主張をバルトは概ね誤認していると看てよいであろう。

持ち越されることとなったが、バルトからの反応がまったくないことをブルンナーが相当案じていたことが判明している（vgl. Jehle, aaO, 309-330）。恐らくはこうしたバルトの実存的な危機的状況を、当時のブルンナーはあまり感知していなかったと思われる。

70 Vgl. John W. Hart, Karl Barth vs. *Emil Brunner: the formation and dissolution of a theological alliance,* 1916-1936, Peter Lang, 2001, 169.

71 Karl Barth, „Nein! Antwort an Emil Brunner 1934 “, in: KBG III 52, 457.

72 McGrath, aaO, 118.

73 Bart, „Nein! “, aaO, 455-456.

74 Ebd, 456f.

75 Ebd, 520.

おわりに

ブルンナーの主張に基づく限り、言語能力と応答責任性を受容体とする結合点理解は決していわゆる「恵みのみ」を超え出るものではない。ブルンナーは啓示の本質に関する存在論的分析において啓示を自然的に認識可能としたのではまったくない。そうではなくて、啓示を指向しようとする方位計が「神のかたち」として人間に残存しているとしたに過ぎない。ブルンナーが到達した結合点理解は、彼自身にとって一つの転機でもあった。それは、彼がその初期にあれほど否定したシュライアマハーのプラトン主義的あるいはロマン主義的な神認識および人間理解への接近と見做されかねない軌道修正だったからである[76]。事実、ブルンナーの主張はバルトからの激しい反論を惹起した。一方で、言語能力に関する主張へのバルトの直接的な意見表明が見られないことは残念である。バルトにとって重要なのは神の視座における啓示の絶対性であって、神の言葉を受け取る側に力点が置かれないのはその意味で必然であろう。しかしブルンナーにとってそれは看過できない課題であった。言語能力と応答責任性という結合点理解は『出会いとしての真理（Wahrheit als Begegnung)』において展開されたイマゴ・デイ理解においてさらに止揚されることになる。

> すべての人間は、罪人と否とを問わず、信仰者であると否とを問わず、（人はみな神の形として創造され、罪を犯してこれを毀損しながらも、イエス・キリストによって回復されるという）この意味において人格存在（Personsein）である。この人格存在はなお失われていないのであるから、人間は他の人格を持たない被造物と区別される[77]。

こうして結合点問題における分析的判断は、出会いと人格の観点と総合されることになる。そこでの言語能力に関するブルンナーの見解については今後の課題とさせていただきたいと思う。

---

76 ブルンナーは *Die Mystik und das Wort,* Tübingen [1]1924, [2]1928においてシュライアマハーの神学を「神秘主義」として排斥し、神の言葉をこれに対置させた。

77 Emil Brunner, *Wahrheit als Begegnung,* Zürich [2]1963, 147.